

芥川文学における△聖なる愚人▽の系譜

—その序章—

宮 坂 覚

はじめに

芥川龍之介は、「羅生門」あるいは「鼻」によって、文壇入りした。それ以後、彼は、ある時期まで執拗に自分の素顔を見せようとはしていない。△日本小説史上もっとも意識的な小説家▽（寺田透）であった彼は、知性派作家、知的作家と呼ばれる。そして、その文学が、しばしば△拵えものの文学▽、△青年の文学▽、△倫理不在の文学▽などと言われるのもそれなりに頷ける。

ともあれ、芥川文学の批評の主流がこのようなものであったことは事実である。しかし、果して、作者と作品の中に平衡的な節度が保れていたかという点と依然として問題は残る。彼の資質そのものがそれ自体であったのか、換言すれば、無理なく作品が創作されていたか、あるいはそこに

齟齬がなかったかという点、否である。それ故に、苦悩が深くなればなるほど、芥川の平衡感覚は脆くも崩れ、保身線を引きながらも自分を語るようになる。

福田恆存は、芥川の資質を次のように論じている。

もつと日本的な——わるくいへば微温的な——罪のない稚純と優情とにたいする郷愁が、芥川龍之介の文学を、ほとんど死の間近まで一貫して流れております。——（中略）——たしかに主題は理智的に処理されてゐます。が、ひとの心をうつのは作者の情感なのです。

（芥川龍之介）

ここで福田氏は、理智的、意図的な芥川作品の中に、芥川が思わず漏らしている熱ばい呻吟を聞きとっている。芥川の△罪のない稚純と優情とにたいする郷愁▽ということに注目した時、芥川文学が抱絡しているいくつかの未開

の問題点が自ら浮上してこよう。そのひとつとして、ここで芥川文学の△聖なる愚人▽の系譜という新しい視点を設定したい。

芥川文学の題材は、ありとあらゆる方面に亘っている。そして登場する主人公達も種々である。弱者、愚人もそのひとつのタイプである。これらの人物達と、芥川がどのような心情的関わりを持っていたのかは興味深い。

芥川作品の中には、強者、英雄などの矛盾や裏面を小気味よく露いて見せるもの、つまり△英雄否定・美談否定▽（三島由紀夫）といわれる作品群がある。このモチーフについては、評価が定着しつつある。しかし、弱者・愚人のモチーフの解明は、遅々として進んでいない。△聖なる愚人▽達についても言を俟たない。

これが長崎著聞集、公教遺事、瓊浦把燭談等に散見する、じゅりあの・吉助の一生である。さうして又日本の殉教者中、最も私の愛してゐる、神聖な愚人の一生である。

（大八・九「じゅりあの・吉助」）

芥川文学の中には、△じゅりあの・吉助▽のような素顔をもった、いわば△聖なる愚人▽が何人かいる。たとえば△ろおれんぞ▽（「奉教人の死」）、△尼▽（「尼と地蔵」）、△れぷろぼす▽（「きりしとほろ上人伝」）、△金花▽（「南京の基督」）、△五位の入道▽（「往生絵巻」）、△権助▽（「仙人」）などがそうである。また、作品の中心人物ではないが、阿濃（「偷盗」）についても注目する必要がある。

彼等は、△信じる▽という行為によって、小賢しい知性や打算を捨て、愚なることも平気で容認する人間達である。いわば、△聡明な知識人▽の芥川とは逆の位相にある人々である。彼等は、芥川文学において特異な存在といえる。その彼等に、芥川は一種の△宗教的救済▽を与えている。それは、△嘲笑や軽蔑▽の手向けという論も生まれるかもしれない。しかし、決してそれだけでは論じられないばかりか、芥川文学のひとつの礦脈への逢着を、自ら断念してしまうことになる。また動もすれば、△怪物▽△妖怪物▽に脈絡を通じそうであるが、芥川の内的な親近感において、峻別して考えなければならない。

これらの△聖なる愚人▽の系譜は、芥川文学の隠れた本流に通じるものである。しかし、この視点から、トータルに論じられたことはない。今まで「じゅりあの・吉助」、「往生絵巻」には、愚者の信仰という視点で論じられたものはある。「じゅりあの・吉助」については、笹淵友一氏が、△異端的興味から書かれた作品▽とか△キリスト教信仰や信徒を嘲る意図をもった作品▽としている。「往生絵巻」については、△作者は『五位の入道』を愛してゐる。憐憫を越えて、まじめに愛してゐるのだ▽（宮本顕治）、△単に愛するにとゞまらず、かゝる神仏の实在を信じた、この求道者に莊嚴なものを感じてゐる▽（吉田精一）、△自己が望んで得られない一種の理想像すら見せていたのではあるまいか▽（長野誉一）などと論じられている。笹淵氏と

他の論者の間には大きな落差がある。笹淵氏には、それなりの明晰な論旨があるが、他の論には未だ発展をみないようである。ここでは、後者の論旨を発展させ、芥川文学における△聖なる愚人▽の系譜を位置づけてみたい。

△聖なる愚人▽の系譜としてトータルに論じることによって、個々の作品に孕まされている問題もより鮮明になるし、芥川龍之介、またその文学の隠れた部分に肉迫できるのではないかと考える。

ただ、芥川は、その文学に、楽天的に素顔をみせていない。それ故に△聖なる愚人▽の系譜の実像を捉えるのは難しい。しかし、生きた△聖なる愚人▽である、芥川に△最も善良な人▽といわしめた室賀文武を想起する時、それに大きな示唆を与えてくれる。そして、芥川が不用意に漏らす吐息から、素顔に近いものを垣間みることは、不可能ではあるまい。

各作品に対する論究は、後の機会にゆずるとして、この小論では、まさに序章として、△聖なる愚人▽の系譜を鳥瞰してみたい。

一

△聖なる愚人▽の系譜成立の必然性に、まず触れてみたい。芥川文学が、一種の仮面の告白であることは、言を俟たない。しかし、その仮面の奥に秘められた素顔はいかな

るものであったのか。「ひよつとこ」の平吉は、死ぬ間際に「面を……面をとつてくれ……面を。」と声を振り搾る。しかし、芥川は自裁までその文学において、「西方の人」によってわかるように△売文の徒▽としての仮面を外すことをしなかった。すでに述べたように△聖なる愚人▽達に送る芥川の素顔の視線が、どこに向けられているかを捜すのは、あるいは難しいかもしれない。しかし、彼が無邪気といおうか、不用意に素顔をみせている「羅生門」以前の作品が、その糸口を提供してくれる。

彼は孤独を愛しながら、孤独に堪へることが出来なかつた。(都会人でありすぎたせるかもしれない)

彼はかなり多量のセンチメンタリズムをもつてゐた。自分でもはつきりそれを意識してゐた。そして其れを露はにすることを怕れた。

〔友人芥川龍之介の追憶〕

これは、親友の恒藤恭が芥川の資質について言及したものである。興味深い文章である。彼の文学における孤立性も、乾燥した文体も、ある程度の作為の上に成り立っていたことを裏づける材料ともなる。ことにこのセンチメンタリズムについては、一貫して彼の文学に、刃毀れ的な様相を帯びながら出現してくる。それも、しばしばマイナスの面を担うことが少なくない。しかし、「羅生門」以前のほとんどの作品には、この面が極く自然に出ている。△日本

的優情V(福田恆存)の原点となりうべき側面でもある。

「羅生門」とそれ以前との質的落差は看過されていた訳ではない。例えば、視点は多少ずれるが吉本隆明氏は、

「青年と死」、「ひよつとこ」など、「老年」につづく作品は、それらを取りまとめて眺めることによって、芥川の資質の指向するものが、芥川に冠せられた主知的作家という呼称と、まったく裏腹なものであったことを明示している。

〔芥川龍之介の死〕

と論じている。これは、福田論と同じく、芥川の資質に肉迫したものである。そして、さらに吉本氏は、
△芥川の作家的本領として考えられている作品群Vは、
△自己の作家的資質を捨てV、△人工的な構成の努力に支えられた苦痛の作品Vである、と述べている。吉本論は、昭和三十三年執筆のものである。その後、葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」が刊行(昭和四十三年)されている。この集に収録されている「老狂人」、「死相」などに目を通すと、芥川の作家的資質というものが、ますます顕著に浮び上ってくる。ともあれ、「羅生門」前後で大きく質的变化が起ったのは動かしがたい事実である。

自分はどうして、かうもあの川を愛するのか。あの何方かと云へば、泥濁りのした大川の生暖い水に、限りない床しさを感じるのか。自分ながらも、少しく、其説明に苦しまずにはゐられない。唯、自分は、昔か

らあの水を見る毎に、何となく、涙を落としたいやうな、云い難い慰安と寂寥とを感じた。

これは、明治四十五年に書いた(発表は大正三月「心の花」)
「大川の水」の一節である。芥川文学には想像できないようなセンチメンタリズムに蔽われている。その他「羅生門」前の作品としては、「老狂人」(明41?)、「死相」(明42?)、「日光小品」(明42)、「義仲論」(明43・2「校友会雑誌」15号)、「老年」(大3・5「新思潮」)、「青年と死」(大3・9「新思潮」)、「ひよつとこ」(大4・4「帝国文学」)がある。この中でも、「青年と死」「ひよつとこ」の二作には、後の傾向の兆しも見られるが、他は、青年芥川の生の資質が自然に出ていっているといつてよい。

また、これらの作品にも大きな潮流があるのも看過できない。詳しい論究は、他の機会に譲るとして、△聖なる愚人Vの系譜に關係があると思われるので触れておく。ひとつは「老狂人」「大川の水」「老年」、そして「日光小品」にみられる微温的世界・美的感傷の世界である。いわば、日本的リリズム、△日本的優情Vに脈絡を通じるものである。あとひとつは、「義仲論」を中心にして見られ、「日光小品」の一部などに見られる野性的世界、革命的な世界である。これは、後の殉教の美学、刹那の感動、あるいは野人への憧憬などに脈絡をもつと思われる側面である。この二つの側面は、「西方の人」の△永遠に守らんとするものV

とへ永遠に越えんとするものVの二律背反に通じるものと考えられる。もちろんこの時点では、二律背反の認識は稀薄で、センチメンタリズムという括弧で括弧することは可能である。そして、また、晩年へいつ死んでも悔いがないやうに烈しい生活をするつもりだったVと告白する芥川にとって、この種のセンチメンタリズムは常に内在したであろう。

佐藤泰正氏は、『老狂人』『木曾義仲論』『日光小品』と続く、四十三年前後を、まさに芥川が芥川たりえた、自己形成の、原点ともみたい。』（『編年史・芥川龍之介、作家前史』昭43・12「国文学」と論じている。そのへん原点Vも多少の振幅を認めた上で、「羅生門」以前、少なくとも「老年」までは、純度が保たれていたのである。芥川が作家として自覚を持った時、このような彼のへん作家的資質V（吉本）は、捨てられていった。

当時書いた小説は、「羅生門」と「鼻」との二つだった。自分は半年ばかり前から悪くこたはつた恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取つて、この二つの短篇を書いた。

（別稿「あの頃の自分の事」大8・1「中央公論」）

ここで、「羅生門」や「鼻」が、一つの自分の心情とかけ離れたものを創作した結果の作品であることを認めて

いる。また、このような告白と軌を一にするような告白が、書簡にもみえる。

此間まで僕のかいてゐた感傷的な文章や歌にはもう永久にさやうならす（大3・11・14 原善一郎宛）

これが書かれた時期は、「青年と死」が書かれた頃である。ここで、言うまでもなく重要なことは、今まで書いていたものをへん感傷的Vと決めつけていることである。前述したように、「青年と死」は、少し問題が残るが、それまでの作品は、なるほど感傷的なものであった。それに、芥川はへん永久にさやうならすVといっているのである。このように芥川を変えたものは何であつたか。周知のように、吉田弥生との恋愛問題であつた。これは、芥川の間人解釈に決定的なものを与えたことは、すでに定説化されている。

イゴイズムをはなれた愛があるかどうか。イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたる事は出来ない。人の上に落ちてくる生存苦の寂寞を癒す事は出来ない。イゴイズムのない愛がないとすれば、人の一生ほど苦しいものはない。

（大4・3・9 恒藤恭宛）

芥川文学の原点のように、必ずといってよいほど引用される書簡である。しかし、すでに何度か言及したことがあるが、私見によれば、次の書簡は、その意味ではより重要なものとなる。

如何に血族の關係が稀薄なものであるか 如何にイ
ゴイズムを離れた愛が存在しないか……中略……かう
云ふ事は皆この短い時の間にまぎ／＼と私の心に刻ま
れてしまいました (大4・4・23 山本喜嘗司宛)

山本宛の書簡は、昭和四十四年、吉田精一氏の手によつて公けにされた七十二通のうちの一つである。年号は、明記されていないらしいが、吉田氏の推定通り、大正四年はまず動かしがたい。よく引用された恒藤宛では、△イゴイズムをはなれた愛があるかどうか▽、△ないとすれば▽となつてゐるが、一ヵ月半後に書かれた山本宛では、△まぎ／＼と心に刻まれてしまいました▽となつてゐる。恒藤宛書簡が公式的に引用され、山本宛書簡に触れることがないので、再び蛇足的であるが言っておきたい。

ともあれ、破恋が、彼の文学に重大な翳りを落し、いわば素直な真情の流出を失速させたのは事実である。このことは△聖なる愚人▽の系譜を考える上で、重要なことである。しばしば芥川の児童文学には、彼の素直な真情が偽装されながら語られてゐるといわれている。△聖なる愚人▽の系譜も、△人工的な構成の努力に支えられた苦痛の作品▽という視点ではなく、反対の位相にあるのではないか。

先に、二つの書簡によつて、芥川の人間解釈に説明を加えた。しかし、それだけでは論じ切れない。芥川の中に揺蕩を発見するからである。

孤立の落莫をみたしてくれるものは 愛の外にない
と思つてゐます すべての属性を(位爵 金力 学力
等の一切)離れた靈魂そのものを愛する愛の外にない
と思つてゐます (大4・5・2 山本宛)

これも、先の山本宛書簡と同様、近年に公けにされたものである。先の恒藤宛のものと合わせよむ時、ここで言う△愛▽とは△イゴイズムをはなれた愛▽であることは明白である。この書簡も年号は推定であるが、編者の推定年号に従うとすれば、彼の中で、△イゴイズムをはなれた愛▽が、完全に消去されたものでないことを示す。とすれば、△聖なる愚人▽の系譜は芥川の資質に届く根をもつたものということをも、明らかにしてくれる材料となる。つまり、単なる小手先だけのものではなく、それなりの苦悶が残されてゐたとも読みとることができるのである。

(註1) 水谷昭夫氏は、「夢十夜」との類似を指摘し、明治四十三年七月以後の成立ではないかとしている(『芥川龍之介の世界』昭44・11 實方清編著『日本近代小説の世界』所収)。ここでは一応、葛巻氏の推定年代に従つておく。

二

△聖なる愚人▽の系譜に組み入れるべき作品は次のようなものがある。すなわち、「奉教人の死」(大7・9「三田文学」)、「尼と地蔵」(大7・9 未定稿)、「きりしとほろ上人伝」

(大8・3、5「新小説」)、「じゆりあの・吉助」(大8・9「新小説」)、「南京の基督」(大9・7「中央公論」夏季特集号)、「往生絵巻」(大10・4「国粹」)、「仙人」(大11・4「サンデー毎日」)の七篇である。また、その原点的作品として、「老狂人」(明42?未定稿)を、おさえておきたい。(ただ、「奉教人の死」については、いささか問題が残る。このことについては後で触れたいと思う。)

△聖なる愚人▽の系譜に数えられる作品は、すでに明らかなように、大正七年から十一年の間に集中している。芥川は、大正七年二月、塚本文と結婚している。すでに前年には、第一創作集『羅生門』を出版し、新進作家としての地位を、確乎たるものにしていた。十年頃から、芥川は、目立って健康に不調を来して、作風にも変化が見られるようになる。すなわち、△聖なる愚人▽の系譜は、芥川の傑作が多く書かれた時期に並行して書かれていたのである。いわゆる保吉物などが書かれだすと、影を潜める。この事実も、△聖なる愚人▽を、単なる方便と見るか、芥川の苦悩の傷跡と見るかによって、論は二つに分かれよう。しかし、△聖なる愚人▽達が、単なる方便でなかった以上、彼等に託されていたものが、他の何ものかによって託されるようになったからである。それについて論を展開しなければならぬが、ここでは、芥川の△侏儒▽あるいは△阿呆▽という自己規定、そして、「西方の人」に発展するその姿

勢ではないかと指摘するに止めておく。

△聖なる愚人▽の系譜の作品群について、まず、無用のことかもしれないが、構想の解説をし、共通の場を構築しておきたい。ことに大半の作品が、多くの読者の目に触れにくい作品であるので、あえてこの作業を経ることによって、△聖なる愚人▽達の群像を明らかにしたい。

この系譜には数えられないが、「老狂人」は、極めて重要な作品である。この作品について一線を画したのは、葛巻氏の「註」^(註1)のように、多少問題のある作品だからである。

△老狂人▽とは、もと旗本の△豆腐屋の隠居^(註2)▽の△秀馬鹿▽と呼ばれている老人のことである。彼は、キリスト教徒ゆえに「大神宮様の御ふだを焼いた罰」で、気が違ったといわれている。ある日、「私」は、その老人の祈禱する姿を目撃する。

「可笑しな奴だね」と笑った私は、今では、その「可笑しい奴」に深い尊敬を感じずにはゐられません。あの祈禱と慟哭、信徒を磔刑に処したと云ふ、封建時代の教制に反抗した殉道の熱誠、——私は、「未」^(註3)だに、あの時老狂人に加へ「た」嘲笑を、心から恥ぢてゐます。

葛巻氏の推定によると、十七、八歳の頃書かれたものとなっている。しかし、後の△聖なる愚人▽の系譜と比して

みる時、些かの距離も認められない。△老狂人▽から△深い尊敬▽の対照となる△秀馬鹿▽も、やはり△聖なる愚人▽の典型的な一人であった。△聖なる愚人▽の系譜の原点として、しっかり押えておく必要がある作品である。葛巻氏によれば、芥川は「老狂人」を「我が若き日の回顧にして、情熱と憧憬と歓楽とに別るゝ悲哀なり。」としている。そのことは、「老狂人」が芥川の真摯な心情の吐露であるということを示唆している。このような視点で「老狂人」を捉える時、その評価に、重要なものを加えることになる。

△聖なる愚人▽の系譜の第一作である「奉教人の死」は、代表作であるので、構想の解説は省略するが、△ろおれんぞ▽は篤信の少女であった。男装していた彼女は、その信仰ゆえに△傘張の娘▽を懷妊させたという汚名を着せられても、弁解もせず、△えけれしあ▽を追放され、乞食生活に甘んじている。そのうえ、生まれた傘張の娘の子供を、命を賭して火事場より救い出す。そこには、まさに一人の信仰に殉じた一人の△聖なる愚人▽を見る。△ろおれんぞ▽は、△御教▽のゆえに、一切のエゴイスティックな言動を避け、他者愛の中に生きる。ただ、ここで、芥川が描きたかったのは△聖なる愚人▽ではない。——あるいは、着想はそうだったかもしれない。——それは、「西方の人」で、いみじくも告白している△殉教者の美学▽（佐古純一郎）であった。

クリスト教の為に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を興へたのである。

そして、△殉教の美学▽は、しばしば論じられているように、「なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極るものぢや。」に行き着き、信仰を貫通して、審美的な芸術的感動へと放抛されている。その観点からは、△聖なる愚人▽の系譜への位置づけには問題が残る。△ろおれんぞ▽は、確かに他の愚人達とタイプが違っている。つまり、ファナティズムと誤し兼ねるような側面がなく、押し殺したような厳しさだけが目立つ。いわば、完成された宗教人を見出ししてしまう。また、「奉教人の死」自体も、その△聖なる愚人▽性が主たるモチーフではない。しかし、後で触れる室賀文武を、生きた△聖なる愚人▽とするならば、また△ろおれんぞ▽も△聖なる愚人▽として認めることも強弁ではないであろう。ともあれ、「奉教人の死」を△聖なる愚人▽の系譜でとらえるのは、それなりの但書が必要となるのである。

「尼と地蔵」は、「奉教人の死」を書いた大正七年に書かれたと思われる未定稿の、十五枚ほどの戯曲形式の小品である。舞台は、京都の町はずれということになっており、そこに△御生身の地蔵菩薩▽を幾多の苦難に耐えながら探し求めている尼がやってくる。その地には、手のつけられ

ないほどの悪戯ざかりの△ちぎう▽という名の子供がいる。尼が△御生身の地藏菩薩▽を必死に探しているのを聞いた△ずるい男▽は、その尼から金銭をせしめたうえ、△ちぎう▽の所につれて行く。

尼が三拝九拝する。その時、木の上の小供が尼の方へ向くと、忽、円光を頂いた、美しい地藏菩薩の姿になる。尼は、柿の実にかこまれた、此小さな地藏菩薩を見て、愈々念珠の手を止めない。暫、沈黙。その内に左で「ちぎう、ちぎう」と呼ぶ声がする。地藏菩薩の姿が又、元の小供になる。さうして慌しく木からとび下りる。

この尼も△聖なる愚人▽の一人であることは、まぎれもない事実である。愚かしい知恵と打算に生きる△ずるい男▽と尼との対照的位相は鮮明である。後で触れる「南京の基督」における△日本人旅行者▽と金花、また「仙人」における△医者³の妻▽と権助の關係が、すぐ想起されるであろう。この作品でも、芥川は、尼の幻覚や錯覚として、△ちぎう▽の△御生身の地藏菩薩▽への変身を描いてはいない。一つの事実として描いている。このことも一応おさえておく必要がある。また、尼への救済は果したが、他の作品と違って、現実の場でプロットを締めくくっているのも特異である。

「きりしとほろ上人伝」は、芥川が生活を文筆に専念で

きるよう切りかえた大正八年に書かれている。△しりあ▽の国の山奥に住む△れぶろぼす▽という大男は、△天下無双の強者▽を求めて、大名の臣下やがて悪魔の部下と放浪する。しかし、その△悪魔▽より強いという△えす・きりしと▽がいることを知る。それを教えてくれたある老人の、「おのれ人に篤ければ、天主も亦おのれに篤からう道理ちや。」という言葉から、△三丈あまり▽の長身を生かして、流沙河という大河の渡し守となる。三年目のある暴雨の夜、一人の△みめ清らかな白衣のわらんべ▽を背負い大河を渡る。川中で次第に△わらんべ▽は重さを増す。△れぶろぼす▽は、やつのことで向こう岸にたどりつき、「はてさて、おぬしと云ふわらんべの重さは、海山量り知れまじいぞ。」ということばに、わらんべは、△頭上の金光を嵐の中に一きは燦然ときらめかいながら▽次のように答える。

「さもあらうず。おぬしは今宵と云ふ今宵こそ、世界の苦しみを身に荷うた『えす・きりしと』を負ひないたのちや。」

「きりしとほろ上人伝」は、完全な芥川のオリジナルではない。^(註3)にもかかわらず、失敗作の目立つ大正八年度中の作品の中で芥川は、この「きりしとほろ上人伝」に愛着をもっている。

予自身は、幾分にせよ自信のある作品は「私の出遇った事」「きりしとほろ上人伝」以外に、一つも発見

出来なかつた。

〔大正八年度の文芸界〕

この愛着は、単にきずのない作品であつただけではあるまい。彼が意識するか、しないかにかかわらず、もっと心情的な愛着があつたのではなからうか。

「じゆりあの・吉助」は、「きりしとほろ上人伝」と同じ年に書かれている。「じゆりあの・吉助」は、「奉教人の死」と並ぶ、芥川の本朝聖人伝である。六、七枚の小品であり、笹淵友一氏もいわれるように、それほど力作ではない。この作品についても、同氏によってすでに比較文学的論究が^(註4)されている。

△愚物の吉助▽は、一人の娘に恋をするが、かなえられず出奔する。三年して帰ってくるがキリシタンになつてゐた。役人に発覚して捕えられるが、その訊問中に

「えす・きりすと様、さんた・まりや姫に恋をなさ
れ、焦れ死に果てさせ給うたによつて、われと同じ苦
しみに悩むものを、救うてとらせうと思召し、宗門神
となられたでござる。」

と、答える。結局、彼は、刑場で、無残にも磔に懸けられた。そして、死体を下してみると、△吉助の口の中からは、一本の白い百合の花が、不思議にも水々しく咲き出でゐた▽。芥川が、この吉助を「最も私の愛してゐる、神聖な愚人」としているのは、すでに述べた通りである。

この作品で特異なことは、初めから△愚物▽という規定

があることである。なるほど、奇想天外なラブストーリーを信じて、全く異つた位相の中で殉教していく。しかし、彼をして磔という無残な死の恐怖をも乗り越えさせたものは、他ならない信じるという行為であつた。その意味では、内容に雲泥の差はあつても「奉教人の死」と類似していると
いってよい。

「南京の基督」^(註5)については、すでに、同じ視点を含めた論考を企てているので、簡単に触れるにとどめる。

カトリシャンである売春婦金花は、生計のために春を販いでいる。状況倫理を先行させ神の恩寵を先取りすること
で彼女は、信仰と自分の生活を抵触させていない。ある時彼女は、客に梅毒を感染され、信仰的良心から休業する。
しかし、混血児に△キリスト▽を見出し思わず体を許す。
すると次の日、キリストが罪を背負つてくれたように、彼女の病は完全に癒えていた。

ただ、ここで終つていたなら、他の△聖なる愚人▽の系譜の作品と変りがない。しかし、周知のように後日譚がついて多少混乱させられる。ともあれ、金花はまぎれもない△聖なる愚人▽の一人である。彼女は、姦淫の罪を孝行と
いうことでいとも簡単に合理化してしまう女性である。その意味では、吉助のように△愚物▽といわれないまでも、多少問題の残る女性である。それでも、病をもつた時、売春を始めた時と同じ論理で、状況倫理から神の恩寵を先取

りできたはずである。しかし、それをしていないのは、
△聖なる▽の純度は高くなる。それが故に、キリストが
南京に下り、また彼女に夢で啓示を与えるという構想が成
立することになるのである。

「往生絵巻」は、△聖なる愚人▽の系譜の中で、この視点
から最も多く論じられている作品である。この作品は、あ
る意味では、「じゅりあの・吉助」と表裏をなす作品であ
る。ことに、エピソードは、非常に興味深い。「じゅりあの
・吉助」では、屍骸の口から白百合が咲き出るが、この
「往生絵巻」では、△まつ白な蓮華▽が咲き出る。「今昔
物語」巻十九の讃岐国多度郡五位間法即出家語十四から素
材をとった十枚ほどの小品である。△殺生好きな▽△多度
の五位殿▽は、狩りの帰りに説法を聞き、そのまま出家す
る。そして、その講師の言から、阿弥陀仏が西方にいるこ
とを聞き、西に向って「阿弥陀仏よ。おい。おい。」
と訪ね歩くうちに海に出る。海辺の枯木に登り、海に向っ
て、また呼び求める。そして七日目に餓えて死ぬが、その
口に白い蓮華が咲いているのを発見される。

この五位の場合は、他の△聖なる愚人▽とは違って、乱
暴な男と造型されている。「きりしとほろ上人伝」の大男
△れぶろぼす▽も乱暴ではあったが、心根の優しい資質を
もっていた。五位は、△乞食なぞも遠矢にかけ▽るような
男で、講師から阿弥陀仏の在処を問うのに、刀でおどして

責め問うような男である。そして、その求道の仕方でも熾烈
であった。

「仙人」は、△聖なる愚人▽の系譜の中では、最も後に
書かれた作品である。これも十枚ほどの小品である。「杜
子春」が、△仙人▽になれなかった話なら、こちらは△仙
人▽になれた男の物語である。

大阪の口入れ屋に、権助という男がやってきて、「仙人
になりたいのだから、さう云ふ所へ住みこませて下さい。」
という。そこで番頭は、医者所につれて行く。医者の女
房は、狡猾な女で、権助をだました働かせようと目論
む。そこで、二十年間奉公すれば、仙人になる術を教えて
やると権助にいう。権助は、その言葉を信じ、身を粉にし
て二十年間奉公する。二十年目の日、権助は約束の履行を
求める。そこで女房は、高い松の木に登らせて、両手を離
させる。墜落すると思いきや、地上の人達を尻目に、権助
の体は空に舞う。

仙人になりたいばかりに、権助は、無賃の二十年の奉公
をする。これも信じるという行為の結果である。そして、
それに対して芥川は、一種の祝福を与えているようであ
る。

以上、△聖なる愚人▽の系譜に属する七つの作品につい
て、その構成と問題を述べてきた。次に、これを踏まえ
たうえで、△聖なる愚人▽の資質などを明らかにしたい。

(註1)「芥川龍之介未定稿集」の「編者註」によれば「二種類の原稿があり、「編者は、それら各、足らない部分と重複している部分とをつなぎ合せて、この一篇の『老狂人』を編集した。」ものである。

(註2)木村一信氏の調査によれば、芥川家の隣家に豆腐屋があったという。(すでに水谷昭夫氏も「芥川龍之介の世界」で紹介している。)

(註3)芥川自身「セント・クリストフの伝記を材料に取り入れ」たものであることを書いている(「風変わりな作品に就いて」)。その比較文学的論究に、安田保雄氏の「『きりしとほろ上人伝』—芥川龍之介の切支丹物致—」(昭29・10「明治大正文学研究」14号)などがある。

(註4)笹淵友一氏に「聖母と軽業師」との比較文学的論究がある。「奉教人の死」と「じゅりあ」の・吉助」(昭43「ソフィア」17ノ3)。

(註5)拙稿「『南京の基督』論—金花の△仮構の生△に潜むもの—」(昭51・2「文芸と思想」40)。

(註6)正宗白鳥「芥川龍之介の文学を論ず」(昭2・10「中央公論」、宮本顕治「敗北の文学」(昭4・8「改造」、吉田精一「芥川龍之介」(昭17三省堂刊)、長野誉一「芥川龍之介と日本古典—特に『往生絵巻』について—」(昭41・12「国文学」)など。

三

二で△聖なる愚人△達に触れてきたが、その人間像や資質について整理してみたい。

まず、彼らの過去を生活環境について考えてみよう。△ろおれんぞ△は、△「えけれしや」の戸口に、餓え疲れて

伏し居△り、寺中で養われ、素性については全くわからない。乞食生活に入るや家庭なるものはない。△尼△についても、△御生身の地藏菩薩△を訪ね求め続けてきた人物として出現し、その他のことについて触れられていない。△れぶろぼす△については、△「しりあ」の国の山奥△に住んでいたことしか書かれていない。△吉助△は、△早く父母に別れ△て小さい頃から下男となっている。△金花△は、△腰も立たない△老父と二人で、△貧しい家計を助ける為に、夜々その部屋に客を迎える。当年十五歳の私窩子であ△る。△五位の入道△の過去については叙爵をうけている訳であるから、相応なものであったろう。(因みに「芋粥」の主人公も五位である。)彼は、妻子を捨てて出家している。このパターンは、「老狂人」の△秀馬鹿△に類似している。△秀馬鹿△もかつては△旗本△であった。△権助△は、△飯炊奉公△に来た男となっている。過去については触れられていないが、それほど過去のあった男とは思われない。

このようにみると、金花をのぞいて——金花もノーマルな家庭生活をしているとはいえないが——すべてが家庭を持っておらず、放浪の中にいる。また、五位以外は、過去について特記するものがない。彼らをとりまく環境は、下層階級あるいはそれに近い場にあるといってもよい。それも、そのことを自ら選び、とりわけ不幸と思っている訳

ではない。性格についていえば、△ろおれんぞ▽は、周知のように、顔かたちが美しいだけでなく、命を賭してまで、自分を落し入れた女の子供を救うほどの人物である。この場合は、「聖マリン伝」という下じきがあるので、完全な芥川のオリジナルの人物造型とはもちろんいえない。△尼▽は、いかなる忍苦も乗り越え、自己の宗教的願望実現のために勤しんだ女である。△れぶろぼす▽は、△性得心根のやさしい▽男として造型されている。これも「奉教人の死」同様、「セントクリストファ伝」The Life of S. Christopher という下書きをもっている。△吉助▽は、すでに最初から△愚物▽として造型されているが、入信後は△朋輩の輕蔑も意としないで、唯まめまめしく仕へ▽るようになっていく。そして、磔による死の恐怖も超克している。△金花▽は、生まれつきの性格と入信によってその地では二人とないほどの△氣立ての優しい少女▽である。△ろおれんぞ▽、△れぶろぼす▽と共通するものを持っている。△五位▽は、大変な殺生好きで、乱暴な男とされている。阿弥陀仏の在処を聞くのに、法師を責め問うている。そして、宗教的願望実現のために邁進するのは、△尼▽とよく似ている。△尼▽の場合は、現世において実現しているのに対して、△五位▽は、生前には実現されていない。願望ゆえに、死を乗り越えているのも注意すべきである。△権助▽は、仙人になりたいばかり、△狡猾な医者 of 女房▽に、二

十年間もただ奉公させられる田舎者である。しかし、その性格についての記述はない。

性格について共通的にいえるのは、△優しさ▽と△素朴さ▽△正直さ▽が機軸になっているということがいえる。

では、△聖なる愚人▽達は、どのような宗教的救済がなされているであろうか。彼等は、嘲笑と輕蔑の対象であった。しかし、彼等はそのまま死を迎えたり、作品の外に抛擲されてはいない。芥川は、その作品の中で、彼等に救済を与えているのである。ことに、死を迎えたものには、聖人、上人が冠せられているのである。

△ろおれんぞ▽は、彼女の宗教的正義ゆえに命を捨てる。そして、濡衣が雪がれている。そして、それにより△奉教人▽となり本朝聖人の一人となっているのである。△尼▽について言えば、△御生身の地藏菩薩▽との対面は一応果され、宗教的願望は実現している。△れぶろぼす▽は、△えす・きりしと▽との対面によって、やはり、宗教的願望が実現されている。そのうえ、△麗しい紅の薔薇の花▽が、それをダメ押している。△吉助▽においては、宗教的諦念によって世俗的苦悩から離脱できている。後で触れるが、△白い百合▽によって、救済がダメ押され、△れぶろぼす▽の場合と酷似している。△金花▽については、異論が残るそうであるが、夢による啓示と、その内容である梅毒の治癒ということによって成就している。△五位▽については、

△白蓮華▽が救済を象徴していると考えてよいであろう。△権助▽は、仙人になることによって救済は明白である。

△聖なる愚人▽達すべては、「心の貧しいものは仕合せぢや。一定天国はその人のものとならうずる。」(きりしとほろ上人伝) という、聖句どおりの宗教的救済を得ている。ただ、この世で、救済を足がかりになお生き続けるものと、殉教的死によって救済が顕証されるものがある。

前者は、「尼と地藏」「南京の基督」の二編である。ことにこの二作は、△円光▽(「尼と地藏」)と△三日月のような光の環▽(「南京の基督」)によって神性を裏づけているのは興味深い。(「きりしとほろ上人伝」でも△三日月ほどな金光▽として出現している。)

また、「仙人」の△権助▽は死という形をとっていないが、「だんだん高い雲の中へ昇つてしまひました。」とあり、昇天している。それは、△仙人▽としての証しにもなっている。つまり、超人間的な道具だて、いわば奇蹟によって、宗教的救済をしているのである。

一方、△聖なる愚人▽の死によって、救済をしているのが、「奉教人の死」「きりしとほろ上人伝」「じゅりあの・吉助」「往生絵巻」の四篇である。彼等は、自分の命を代償にして△聖なる▽と冠せられた人々である。「奉教人の死」の場合には、その行為自体によって△聖なる▽を決定的にしている。「きりしとほろ上人伝」の場合は、すでに

死の寸前に、願望が実現されている。(△五位▽の場合も「今昔物語」では、「海ノ中ニ御音有テ、『此ニ有』ト答へ給ヒケレバ」となっている。^(註1)) また、この作品を含め、決定的な条件となっているのが、花であることは注目に価する。花による奇蹟は、「きりしとほろ上人伝」が△麗しい紅の薔薇▽ (暗示をうけたとみられる The Golden Legend においては flowers and fruit とあるだけで、このような限定はない。)、
「じゅりあの・吉助」が△白い百合の花▽、「往生絵巻」が△まつ白な蓮華▽となる。「きりしとほろ上人伝」では、それが詠嘆的に語られているのに対して、他の二篇は△口から咲く花▽^(註2)であり、しかもそれが人々に△聖なる▽を決定的にさせているのである。これは大変興味深い。笹淵氏は、「じゅりあの・吉助」と、アナトール・フランスの「聖母と軽業師」の△口に咲く花▽を、比較文学的視点で論じている(二の註4参照)。「聖母と軽業師」では、バルナベという無学の軽業師が死ぬと△口から Maria の御名の五文字を表はす五輪のバラ▽が咲き出る。ただ、「往生絵巻」の場合の△口に咲く花▽は、今昔物語の「口ヨリ微妙ク鮮ナル蓮花一葉生タ」からきているので、「じゅりあの・吉助」の△口に咲く花▽の場合も、今昔物語における△口に咲く花▽の影響がないとは言えないのではないか。

この二つの作品から、△口に咲く花▽について、東西に存在することに興味を持っていた。そして、かねてからヨ

「ロップ文学において、「聖母と軽業師」にとどまるものでなく、カトリック文学圏に一つの古典的パターンとして存在するのではないかと想像していた。少なくとも、スペイン文学者大島正氏の御教示によって、中世スペイン文学の中に、一つの流れがあったということを知った。他の国のカトリック文学圏にも、マリア崇拜と結びついて存在するのではないかと思う。大変興味深い比較文学的問題を孕んでいる。ともあれ、△聖なる愚人▽像に、このような△口に咲く花▽が出現したのは、決して偶然ではなかった。この「花」による奇蹟によって、約半数の愚直な物狂いと思われた人物が、一変して△上人▽となり、△聖人▽となったのである。

△聖なる愚人▽は、すでに明らかにしたように、放浪に近い生活をし、一途に求道を行っている。性格的には、ほとんどの人物が素朴であり、人並みはずれた優しさを持っており、世俗的な志向から外れている。宗教的救済は現世と来世の違いがあっても、一応行われている。そして、それも、超現実的な奇蹟によって証明されている。

(註1)「あの話は今昔物語に出てゐる所によると五位の入道が枯木の梢から阿弥陀仏やおうい／＼と呼ぶと海の中からも是に有りと云ふ声が聞えるのです―中略―この一段だけは省きました」(大14・2・12 正宗白鳥宛)

(註2)大島正氏の比較文学会九州支部での講演の表題よりいただいた。大島氏のこの△口に咲く花▽については、清水純孝氏の御教示によった。

四

芥川自身は、彼の文学の△聖なる愚人▽達にどのような共感を持っていたのか。それは、芥川の文学創造の方法からすれば、簡単にはその答えは得られないかもしれない。なるほど、彼の書簡などを繙いてみても、△聖なる愚人▽達に与えたものは、金花に与えた感想以外にはない。ただ、「君自身無数の金花たちを君の周囲に見た覚えはないのか」(大5・7・15 南部修太郎宛)という口吻も、反論のための文章であることを考え、値引きして考えねばなるまい。ということは、芥川の△聖なる愚人▽達に対する感想は、皆無に等しいといってよい。言うまでもなく、だからといって芥川が何ら興味を示していない、つまり素材や文学創造の方便でしかなかったことにはならない。むしろ、芥川の△聖なる愚人▽の本性である△幼な子のような人▽△心貧しき人^(註1)▽への姿勢は△嘲る為▽△軽んずる為▽(「ある鞭」)ではなかった。

すでに、「はじめに」で触れたように、部分的ではあるが、諸家が△聖なる愚人▽と芥川との深い関わりを認めている。△憐憫を越して、まじめに愛してゐるのだ▽(宮本顕治)、△求道者に莊嚴なものを感じてゐる▽(吉田精一)、△一種の理想像をみていたのではないか▽(長野尊一)などである。しかし、芥川自身に言及がない以上、次への展開

は困難なことである。それは、今までの研究成果が物語っている。しかし、芥川研究の上で、重要人物とされてきた、生きた△聖なる愚人▽室賀文武の全体像が次第に明るみに出されている現今において、新しい展望を用意されていると思われる。

室賀文武は、^(註2)いうまでもなく、芥川の生涯を貫ぬき同伴したキリスト者である。彼と△聖なる愚人▽との関わりについては、すでに拙稿「南京の基督論」(二の註5)において簡単に触れておいた。また、その生涯については、拙稿^(註3)があるので参照していただきたい。先行論文と重複するのも心苦しいので、簡単に論じるにとどめたい。

室賀は、「鹵車」(赤光)の△或老人▽のモデルとなった、芥川に良きにつけ悪しきにつけ大きな影響を与えたと思われる人物である。室賀は、芥川文学の△聖なる愚人▽達と多くの共通点を持っている。

或夏の近づいた月夜、武さんは荷物を背負つたまま、ぶらぶら行商から帰つて来た。すると家の近くへ来た時、何か柔かいものを踏みつぶした。それは月の光に透かして見ると、一匹の墓がへるに違ひなかった。武さんは「俺は悪いことをした」と思った。それから家へ帰つて来ると、寝床の前に跪き、「神様、どうかあの墓がへるをお助け下さい」と十分ほど熱心に祈禱した。(武さんは立ち小便をする時にも草木のない所にした

ことはない。尤もその為に一本の若木の枯れてしまつたことは確かである。)

武さんを翌朝起したのは、いつも早い牛乳配達だった。牛乳配達達は武さんの顔を見ると、紫がかつた壤をさし出しながら、晴れやかに武さんに話しかけた。

「今あすこを通つて来ると、踏みつぶされた墓がへるが一匹向うの草の中へはひつて行きましたよ。墓がへるなどといふやつは強いものですね。」

武さんは牛乳配達達の帰つた後、早速感謝の祈禱をした。——これは武さんの直話である。(素描三題)

ここに描かれている室賀は、△聖なる愚人▽そのものといえまいか。室賀は、一生を独身で通し、放浪に近い生活を送っている。秀才であつた彼は、二十五歳の時政治家を志ざして上京、芥川の実家の経営する耕牧舎に住みこむ。幼児の芥川の子守りなどもしている。しかし、醜い政治の世界に嫌気がし、これを断念する。その空白をうめるべく内村鑑三の門に入るのである。無教会系の信者になると、きつぱりと耕牧舎を辞め、行商生活に入っている。隠者の的といつてよいほどの求道三昧な生活をし、世俗的興味の薄かつた人物である。芥川も、「春城句集序」「素描三題」などで、その人となりを描いている。その特異な生活は、聖書会社に住み込むようになってからも変っていない。それは、他人からみれば、やはり△物狂い▽でしかなかった

かもしれない。その事情は△聖なる愚人▽達といっしょである。また、「素描三題」に描かれている室賀の姿には、△金花▽や△権助▽が想起されるし、震災の時命を賭して火中にとびこむ姿には、△ろおれんぞ▽が想起される。また、その隣人への優しさには△れぶろぼす▽が、求道三味のエネルギーには△五位▽が想起される。すでに繰り返し述べてきたように、この室賀文武は、芥川にとってまぎれもない生身の△聖なる愚人▽であったのである。

芥川にとって室賀は、自分の出生時から、自分の周辺を知った男であり、その真摯な信仰者ゆえにすべてを明けひろげて見せられた男でもあった。

或東かぜの強い夜、（それは僕には善い徴だった。）

僕は地下室を抜けて往来へ出、或老人を尋ねることにした。彼は或聖書会社の屋根裏にたつた一人小使ひをしながら、祈禱や読書に精進してゐた。僕等は火鉢に手をかざしながら、壁にかけた十字架の下にいろいろのことを話し合つた。なぜ僕の母は発狂したか？なぜ僕の父の事業は失敗したか？なぜ又僕は罰せられたか？——それ等の秘密を知つてゐる彼は厳かな微笑を浮かべ、いつまでも僕の相手をした。

「幽車」△五赤光▽

芥川は室賀を、しばしば「家にくる人の中で最も善良な人」と公言している。そして、周知のように、自裁の寸前に

呼んで自分の生きる道を相談したのも室賀文武であった。もちろん、室賀が、△聖なる愚人▽達と同様にその生にすべてを樂天的にかけていたとは思わない。しかし、△私の愛してゐる、神聖なる愚人▽という時、室賀文武こそ、芥川の最も愛した一人であったのは、想像に難くない。もちろん、この△愛した▽の意の中に、△「愛する」ことは、軽んずることの裏側▽（笹淵）ということも読みとれないことはない。室賀の中にも、このような芥川のシニカルな目がなかったとはいえない。むしろ、あったであろう。しかし、「鼻」における「愛すべき内供」の△愛する▽ことの比較においてさえ、△聖なる愚人▽達へのそれは、本音に近いと考えたい。それを裏づけてくれるのが室賀文武である。

（註1）「わたしを感傷的にするのは、唯無邪気な子供だけである。」（『侏儒の言葉』）

（註2）「素描三題」「春城句集序」「幽車」（芥川）、「それからそれ」『芥川龍之介の回想』（下島勲）、「旧友芥川龍之介」（恒藤恭）、「追想芥川龍之介」（芥川文）など参照。

（註3）「芥川龍之介と室賀文武——芥川龍之介とキリスト教への一視点——」（46・12「国文論集」5）

むすび

芥川ほど、種々のタイプの人間を書き分けた文学者はいないであろう。△聖なる愚人▽の系譜に登場する人々も、

一つの際立ったタイプである。確かに△異端的興味から出
発▽（笹淵）したものであるかもしれない。少なくとも、
△聖なる愚人▽達の讃美のために創造されたとは信じられ
ない。しかし、△異端的興味から出発▽して、異端的興味
のうちに終焉したであろうか。裏側では、それと矛盾した
ロマンティックな心情があったはずである。自分にないも
のを求め、それも断念するであろうことを認識していた芥
川の心情は、やはり微妙に△たゆたい▽をみせていたに違
いない。否、ひょっとすると、児童文学などの中に、素顔を
気づかれず見せていたように、△聖なる愚人▽の系譜も、
青春時代にすでに知性によって奥深く押えこんでしまった
素直な心情の噴出口であったかもしれない。後に彼が、自
分に与えた呼称の△阿呆▽や△侏儒▽という規定の仕方にも
なにか、そのことを示唆しているようではない。

「事によると自分といふものは絶対の『他力』によらな
いと得られないかもしれない」（大3・3 恒藤宛）と青年芥
川は書いている。すなわち、自己を捨てることによって、
より確かな自己を得られるのではないかと書いているので
ある。△聖なる愚人▽達は、△自己を捨てる▽ことによっ
て、より強靱な自己を得た人達である。芥川の中には、こ
のような姿勢への憧憬は常にあった。しかし、芥川が晩年、
「彼の前にあるのは、唯、発狂か自殺だけだった」とし、
「彼は、神を力にした中世紀の人々に羨しさを感じた。し

かし、神を信ずることは——神の愛を信ずることは到底彼
には出来なかつた。あのコクトオへ信じた神を！」（或阿
呆の一生）と告白する。一郎（「行人」）が△死ぬか、気が
違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つ
のものしかない。▽と苦悩するのを想起する時、芥川にと
って△聖なる愚人▽達のいる世界がどのようなものであつ
たかがわかる。彼にとって、やはり△出来なかつた▽世界
であつたろう。しかし、一方で、「理性のわたしに教へた
ものは畢竟理性の無力だつた。」という理性派の彼のみせ
る矛盾は、△聖なる愚人▽達の世界に△無力▽でないもの
をみていた一つの証左ではなかつたであろうか。

芥川文学における△聖なる愚人▽の系譜は、彼の中に存
在する矛盾をそのまま抱絡したものであつた。

附記

本稿は、近代文学会九州支部春季大会（昭51・6・20於
福岡大学）のシンポジウム「芥川龍之介の再検討」におけ
る報告、および福岡女子大国文学会（昭51・6・27）にお
ける「芥川文学における愚人の系譜」と題して口述発表し
た内容に基づいて新たに執筆したものである。